

あでやかな布地に咲いた春の花々、縁起物や古典柄。緻密に描かれた花鳥風月に職人の技が光る。

日本の技と粋を伝える



「友禅」の起源は諸説あるが、江戸時代中期に京都の扇絵師・宮崎友禅齋から始まったとされる。多彩な色使いの扇絵が人気となり、その画風を用いた染め物が「友禅」の名で加賀や江戸にも広まったと伝えられている。

友禅にはいくつか技法があるが、小林さんが手掛けるのは、江戸時代から続く「本友禅」。「挿し伏せ(さしぶせ)友禅」ともいう。特徴は、模様の輪郭を浮かび上げさせる細かい線、糸目(いとめ)にある。染料のじみを糊で防ぐ糸目糊置(いとめのりおき)を施し、筆や刷毛で絵を描くように布地を染める。1枚の着物を仕上げるまで、図案から下絵描き、糸目糊置、地入れなど10工程以上。2カ月以上を要する。

ここ数年は糸目にゴム糊を使う職人が多くなった。それでもあえてもち米とぬかを混ぜた真糊(まのり)を使う。古くからのこのやり方を守る職人は今はわずか。図案から仕上げまで全てを一人でこなせる貴重な職人でもある。

図案には古典柄のほか、身近な野草や高山植物を好んで描く。「派手さはないけど好きなんです。野山の花にも季節があり、個性があるから」

自宅兼工房がある由利本荘市浜三川は、海と山に囲まれた場所。時には海辺を散歩し、野山で草木を愛でながら、黙々と作業に打ち込む。東京での修業時代を含め、職人として40年。「長年同じ作業の繰り返しでも柄や条件は毎回違う。飽きないですよ、友禅は」。機械や大量生産では出せない味。手に取る人、袖を通す人への思いを込めた染め色は、温かく柔らかい。

私のGALLERY 友禅



MASAO KOBAYASHI

友禅 模様師
友禅工房 風
小林 昌夫さん
秋田市中通2丁目1-48 仲小路ビル2階
TEL.018-835-5673



▲額用飾り袱紗(ふくさ)



▲お祝い包み袱紗(ふくさ)